W ―ダブル―

玖珂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｗ　―ダブル―

【Ｎコード】
Ｎ８８２８Ｉ

【作者名】
玖珂

【あらすじ】
根拠も何もない、ただ漠然とした予感だけを感じていた
それが訪れるときに、怯えながら過ごしていたのはきっと。

01

＋

「恭（キョウ）、静かにしなっ！」

広いスタジオの中央で、シャッターを切る音とその度に光るフラッシュだけが絶え間なく続いていた。
作り出される雰囲気は、まるで異次元のような空間。
ライトに浮かび上がる長身の男と、カメラを手にその前を動くカメラマン。

「…佐伯さん、そんな声出してソレ、ブレないんですか」

シャッターが切られるその一瞬前、男の視線が動く。
その先には、先ほど機材を倒したことでカメラマンである母親に怒鳴られ、意気消沈する一人の男がいた。

「……ブレないわよ。プロですもの。
そんなことより珍しいわね？緒李（イオリ）が撮影中に会話するなんて。」

含み笑いの様な表情をレンズ越しに見せられ、緒李と呼ばれた長身の男は、僅かに視線を下げた。
それを見続けながら、佐伯万里（サエキマリ）は言葉を続けた。

「いいのよ、あのコは放って置けばそのうち元に戻るんだから。ア

レ、うちの一匹息子なの、恭おいでっ」

「次はなんだよ、大体さっきのだって人使い荒いから　ああなるんだろっ」
表情を歪め大きな声で喚きながら、恭は中央へと進み出た。
それを見ていた万里と緒李が小さく噴出すのを目にして、恭の眉間に更に皺が増える。

「手が止まってますけど、プロカメラマンにトップモデルさん？」
負惜しみの一言に、いよいよ緒李が声を上げて笑う。

「さすが、佐伯さんの息子ですね。……ソックリだ」

「どこがよっ」
「どこがっ」

間を置かず入るピッタリと揃った異論の声に緒李は
一段と笑みを深めた。

「ほら、ね？」

その表情に、万里は数秒の間を置いてふと我に返り、下げていたカメラを構えた。
しかしシャッターを切ろうとした時にはもう元の緒李に戻っていて。

（……カメラマン失格だわ）

良く知る男の、見慣れない表情に見惚れるなんてことは。

「はじめまして、麻生緒李です。恭君。」
「どうも。……イオリってどんな字書くの？」

視線の先で、自己紹介を交わす二人を見ながら苦笑する。
再び、構えていたカメラをゆっくりと下げながら
後ろのスタッフに撤収を告げた。

「まったく……。
恭っ、緒李は名乗ったんだからアンタもちゃんと名乗りな！……
それから緒李、うちのココう見えて貴方と同い年なのよ。」

02

＋

「今から行くお店、私の友人が開いたお店でね。美味しいのよそれがまた！」

狭い車内の後部座席に収まった二人の男をバックミラー越しに見ながら、万里は再び噴出した。

先程の、恭が同い年だと告げた後の緒李の表情が甦る。

（……やっぱり今日のアタシはプロ失格だったわ。）

あの瞬間、再び訪れた最大のシャッターチャンスを逃したことは否めない。

しかし……。

（緒李の、あの顔……）

「佐伯さん、笑い過ぎですよ。運転してくださいよ、ちゃんとね。」

再び頬が緩みかけたその時、後ろから落ち着いたトーンの声が届いた。

初対面から何故だか上に立とうとする息子の恭を、やんわりとかわしている緒李の方へ鏡越しの視線を流す。

「あら、失礼ね。こう見えてもゴールドよ？……ほら、恭。
　アンタ小さいんだから緒李にもっと場所譲りなさいよ」

その言葉に、恭が緒李に視線を移し、相変わらず棘のある声音で言

う。
「こんな細っこいんだもん、コレで十分でしょ。」
隣からかみ殺した笑い声。
「悪かった、って言ったろう？恭」
「別に怒ってないし！大体なんで呼び捨て！」
「だって、同い年だからね。恭も呼んでよ、俺の名前。佐伯親子には許す……なんてね。」
「……？」
身体も歳も立派な男二人の、余りにも子供じみたやり取りを聞きながら、万里は流れる手つきで車を停めた。
（でも、あの緒李を僅かな時間でこうも変えられるなんて、うちの息子も捨てたもんじゃないわね、なんて。）
もう一度、今度は気付かれないように笑みながら万里はエンジンを停めた。
「さあ、着いたわよ！ほらさっさと降りる降りる。」

＋

「素敵なお店ですね。」
店に入り、促されるまま奥へと進めば、小さいながら完全な個室が用意されていた。
揃って席に着くとすぐに緒李が感嘆の声を上げた。
「でしょう、この部屋なんてアタシのために作ってくれたんだから

！モデルさんと気兼ねなく来れるようにってね。」
「……作らせた、の間違いじゃない。可哀相に松田さん。」
「恭っ！」
万里が声を上げると同時に、３人ではない別の大きな笑い声が響いた。
「……でも強ち間違いじゃないんだよ、恭君の言うこと。」
「松！」

立ち上がった万里に合わせ、緒李もすぐに席を立つ。
「はじめまして、麻生です。お話から察するに、オーナーの松田さんでしょうか？」
「ええ、はじめまして。いつも拝見していますよ。麻生君。オーナー兼万里さんの友人の松田です。
よく万里さんから話しに聞いていたから初対面な気がしないんだけどね。
……でも、麻生君ってもっとクールな印象かと思っていましたよ。」
，
……素敵な方ですね。，

続けられた言葉に、万里が盛大に噴出した。

「違うのよ、松！
このコ、いつもはもっと無表情でねー、綺麗に笑って他人をあしらう厭味な奴なのよ。
ホントは誰よりも優しいくせにね？それを隠して、その代わり他人にも甘えない。
……今日はうちのコレにペースを乱されてるって感じかしら。ああ、楽しいわ。」

その言葉に、笑んでいた緒李の表情が鋭いほどに引き締まった。
そして、その変化はその場にいる3人にもしっかりと伝わって。

「……とにかく、ゆっくりしていってくださいね。
今日は特別メニューを出させていただきますから。それでは。」

一番先にオーナーである松田が、年齢を重ねた深みのある声音で静かに告げ、部屋を出て行った。
それを見届けて、恭が口を開く。

「母さん、もっと言い方があるだろ、当人の前でそんな風に！
いい歳してそんなだから……」

万里に強く睨まれて、語尾を丸めた恭は、そのままグラスに口をつけた。
そんな様子を見て、緒李が再び笑う。

「……すみません。そんな風に言われるなんて思わなかったのでつい。
カメラ越しに見られてるんですね俺って。けど……。」

緒李は、一度言葉を切った。
それからゆっくりと視線を向ける。
3人で使うには少しばかり広い円卓の、斜め先にいる恭のもとへ。

「……ずっと、独りだったので。
分からないんですよ、他人との距離の取り方とか。小さい頃は随分粋がってましたから。」

そういって、静かに微笑んだ緒李の顔は、見慣れたモデルのそれで。

「あー、おなか減った。」

僅かに流れた静かな時間と張り詰めた空気を換えようと恭が上げたわざとらしい声をきっかけに、
３人は再び笑いあった。

03

＋

暫くして運び込まれた料理を愉しみながら、
３人は近況や世間話など何でもよく話した。
帰りは松田に送ってもらうからと酒を飲み始めた万里に苦笑しながら、
緒李は彼女のために少しばかり高級なボトルを注文した。

モデルとして仕事をするきっかけをくれたのが、万里だった。
世間一般では「奇麗」と称される自身の容姿を緒李はひどく持て余していて。
「奇麗」だからと近づいてきた人たちは、緒李が何も持たないと知ればあっさりと離れていく。
そんなことが何度もあった。

そもそも緒李には、両親との記憶が無い。
それ故、誰もが無条件に得られるはずの愛され方を知らない。
孤児院の大人たちは、優しかった。
皆に、平等に、優しかった。

幼い頃、休日の公園によく通ったのはそんな緒李にとって自分の境遇を
敢えて思い知る為の行為だった。
声を掛ければ、いくらでも友達は出来た。
公園にいる間は、自分が孤児だなんて誰も気にしない。
けれど、楽しい時間は直ぐに過ぎるもので、日が傾く頃、ひとりま

たひとりと
親の手を繋ぎ帰って行く。
緒李は、そんな彼らを全部見送って暗くなった公園を後にする。
そうして、自分自身に実感させていた。

自分は独りなのだ、と。

多くを望んでも、叶うことは無い、と。

朗らかに笑いながら食事を続ける万里を見ながら、
緒李はふと万里との出会いを思い返した。

１８歳で孤児院を出てから、孤独感は日毎増していった。
生きることに意味を見出せなかった当時の緒李は、短期のアルバイトで食い繋いでいた。
そのうちのひとつだったイベントスタッフの現場で、モデルをしないかと誘われた。

「折角使える武器を持ってるんだから、使えば良いじゃない。
謙遜なんてクソ食らえ、よ。

君に「奇麗」しかないっていうならそれを存分に使えばいい、それだけのこと。
まぁ、どんなに「奇麗」でも、そんな眼をした君を
撮りたいなんて思わないけどね、アタシは。」

自分から誘っておいて撮る気がしないとはなんて人だ、と思ったことを覚えている。
そんな出会いだったのに、気付けば緒李はカメラの前に立っていた。

「感謝、してるんですよ。佐伯さんには、とてもね。」

静かに呟いた緒李の言葉を、佐伯親子は敢えて聞き逃したふりをした。
その表情が、あまりにも寂しそうで。

「そういえば、決まったの？日取りとか」

徐に席を立ち、緒李の元へ行った恭は、グラスに酒を注ぎながら万里へと視線を向ける。

「日取り……？」

恭が直ぐ傍にきたことに、少しばかり驚きながら緒李が疑問を口にする。

先ほどまで終始自分のペースで上機嫌に食事をしていた万里が飲みかけのグラスをゆっくりとテーブルに戻した。

「恭、何も今聞くことでもないでしょうに！」

「いいじゃん、こっちにも都合があるでしょ、

いつまでもこそこそしてたっていつかはばれるんだから。」

顔色ひとつ変えずに飲み続けていた万里の顔が、見る間に赤く染まる。

そのやり取りで、緒李は「日取り」の意味を推測した。

「佐伯さん、ご結婚されるんですか？」

「さっきの松田さんとね！」

緒李の疑問に答以上の返答をしたのは、隣にいる恭だった。

そのまま自分の席へと戻り、順に二人と視線を合わせ微笑んだ。

「だから、俺も独り暮らししようと思ってるんだよね。」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8828i/

Ｗ ―ダブル―

2011年1月16日03時53分発行